

時代の転換の予感

第一生命経済研究所 代表取締役社長 矢島 良司

NHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」が好評で、大きな反響を呼んだ。ドラマの主人公は幕末に生まれ、明治、大正の時代に活躍した女性実業家広岡浅子がモデルである。

当時の男性中心社会にあって、鉱山、銀行、生保経営に参画するとともに、女子大学創設にも力を尽くすという主人公の八面六臂の活躍と波瀾万丈の人生を描いた物語は一億総活躍社会の実現という時代の要請にも適い、多くの視聴者の心をとらえた。

特に幕末から明治にかけてのストーリーでは、福沢諭吉をはじめ多くの歴史上の有名人物を登場させるとともに、婚家(大阪の両替商)の没落の危機を救う活躍劇や大阪財界の重鎮五代友厚との交流を描き、俳優の人気も手強い「五代ロス」なる現象まで巻き起こすなど話題に事欠かなかった。

思うに、幕末から明治にかけては政治、経済、社会そして人々の価値観全てが根底から覆ったまさに激動の時代であった。

その後の日本の歴史の中でも、これほどまでに世の中が変化したのは先の戦争ぐらいではないか。

その明治維新から敗戦まで約80年、幕末をペリー来航からとするとその間約90年。一世代30年とすると丁度三世代で歴史が大転換したことになる。

同じ年数、幕末から歴史を遡ってみると、西暦1770年前後となるが、この時代はいわゆる田沼時代で、重商主義政策がとられた時代であった。その後時代は制度疲労が目立つようになり、江戸後期へと移って行く。

再びそこから同じ年数を遡ると、1690年頃は元禄時代にあたり江戸幕府の最盛期である。更にその前は、江戸

幕府誕生となる。

どうやら17世紀以降の日本の歴史は、主権国家体制の成立、産業革命、欧米列強のアジア進出といった世界の潮流の中で、90年前後経過すると、時代の節目を迎えているようだ。

また、この節目には不幸にも幾度となく日本は大震災に襲われている。元禄の関東大地震、ペリー来航時の南海トラフを震源とする安政地震、終戦前後の東南海、南海地震などである。

こうして歴史を振り返ってみると、戦後70年が過ぎた今日、そろそろ時代の転換点が近づいているようにも思える。

現在の日本は少子高齢化の進行により、社会、経済に解決困難な多くの問題が生じており、今後より深刻化する状況にある。現状に安住し、このまま手をこまねいていけば、人口は減少し、都市は消滅し、社会保障制度は持続困難となり、雇用は確保されなくなる。

90年サイクルはひとつの仮説に過ぎないが、我が国にとっての核心的課題である少子化への対応が遅れば、戦後90年(今から20年後)の未来の日本はあらたな巨大地震の発生とともに、衰退国家として歴史に埋もれていく転換点に立たされているかも知れない。

今こそ国だけでなく、企業そして国民一人ひとりが少子化問題の重要性をあらためて認識し、一丸となって少子化対策に取り組んでいかなければならない。

日本の未来の朝を明るく照らす—それは今日を生きる現世代の責務である。私達一人ひとりの覚悟と実行が問われている。